

## 退官に寄せて



渡邊康史さん

私は、平城宮跡資料館が開館した昭和45年の夏の終わり頃に採用となり、以来34年余の奈文研生活を送らせていただきました。

入所当時の平城宮跡は、目につく建物として遺構展示館と資料館及び第1・2収蔵庫だけが建設されており、見渡す限り草原だという印象

でした。ただ、遠く大極殿土壇上に1本の松が、風雨や火災になんとか耐えて踏ん張っており、平城宮跡のランドマークとなっていました。

平城宮跡資料館は、平城宮跡発掘調査部の庁舎でもあり、各調査室が並んでおりました。毎日、その日の発掘調査の状況や問題などが、話題となり、議論され、対策や次の日の行動方針などが熱く語られておりました。発掘調査というものを全く知らなかった私は、お陰で自然に勉強させてもらえることができました。当時の先輩たちが、大変な個性と平城宮跡に強い思いを持った人たちであり、怖い存在でもありましたが、実に多くのことを教えていただいた思いが強いです。

整備では、水鳥が集まる水辺を造り、子連れの水鳥を見た時には本当に癒されたものでした。その後、基本構想の発表もきっかけとなり、平城宮跡の整備事業予算が何段階かで増えていきました。特に平成5年から「朱雀門」及び「東院庭園」の復原が同時にスタートし、これまでにない事業規模にとまどいも多く、研究所あげでの取り組みで完成することができました。さらに現在進行中の「大極殿」復原をスタートするまで、参画できた幸運は、私の人生において、まるで三段跳びをしているかのような感じでした。ふり返ってみますと、濃い中味であったと思います。一瞬だったような気がしております。

先輩方をはじめ、現奈文研の方々、協力いただいた地元の皆様、そして現場で実際に工事を進行していただいた方々など、多大なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、気持ちよく応援いただいたことに、強くお詫びと感謝の気持ちで一杯でございます。本当にありがとうございました。

(平城宮跡発掘調査部 渡邊 康史)